

日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇二二五年（令和七年）十一月一一〇四

第一二號（通卷第四八號）



八大山人「安晚帖」双雀圖（泉屋博古館蔵）

目録

卷頭言

二 学会の今後の取り組みについて

小島 毅

四 台湾大学中国文学系に滞在して

鳥谷まゆみ

六 海南省第二届东坡文化国际论坛に参加して

柴田 寿真

八 中国古典小説研究会・公開シンポジウム
「中国古典小説のここが面白い！」実施報告

上原 徳子

一〇 二〇二二五年度日本中国学会賞について

一一 各種委員会報告

大会委員会 論文審査委員会 デジタル化推進委員会

一四 二〇二二五年度 会員動向／新入会員一覧

一五 日本中国学会 二〇二二四年度（令和六年度）
収支決算書

一六 日本中国学会 二〇二二五年度（令和七年度）
予算書

一七 事務局からのお知らせ

一九 「会員論著目録（二〇二二五年）」作成への協力
のお願い

二〇 「日本中国學會報」論文執筆要領

編集 ● 放送大学鹿児島学習センター 高津 孝
〒892-10816 鹿児島市山下町14番50号
メールアドレス : gakkaikadaiyonikagoshima@mail.com
発行 ● 日本中國學會
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内
メールアドレス : info@nippon-chugoku-gakkai.org
日本語版ホームページ : <https://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi>

ついて学会の今後の取り組みに

小島
毅

理事長

本年4月から理事長を務めています小島毅です。東京大学に奉職し、儒教の歴史とその王権論、宋明理学の東アジアでの展開について研究しています。

理事長就任後はじめての巻頭言なのでその挨拶と抱負を述べることにします。

1) デジタル化の推進

大木理事長のもとで前の理事会の決定事項として、デジタル化推進委員会の新設があります。詳しくは委員会からの通知事項に書かれるとと思いますが、これによって長年懸案だった情報の収集・公開の迅速化・効率化が期待されます。これまでも会員論著目録の作成や、広報委員会による学会ホームページの充実、選挙管理委員会による投票の電子化など、IT技術の進歩を受けての施策は行なってきました。今後は各委員会が引き続きその職掌における利便性の向上を図るとともに、デジタル化推進委員会に検討してもらって多方面にわたる改善を進めていく所存です。皆さんの協力をお願いします。「パソコンやスマホは苦手だ」というかたにもわかりやすい、近年

のはやりことばで「包括的 (inclusive)」な取り組みをいたしますのでご安心ください。そもそも私自身が「苦手組」です。

これに関連して電子ジャーナルについて言及します。自然科学系の学会では今やごく普通のことになっており、社会科学系や人文学系でもちらほら見かけるようになりました。本会の類縁学会の中にも経費節減のためすでに学会誌の電子ジャーナル化を実施したり検討課題としたりしているところがあります。本会はおかげさまで財務上まだそうした状況ではなく、また掲載論文の性質からも縦書き冊子体が適切であると個人的には考えます。しかし他方で国際的な公開性の観点からは電子媒体の活用が必須で、掲載後1年が経過した論文については著者の了解を得たものについてPDFファイルを提供していることはご存知のとおりです。学会誌への掲載論文のうちに単著に収録して出版するというのが私たちの分野の慣行であり、一刻一秒を争う（と聞く）自然科学系とは違って即時の一般公開は適当ではないでしょう。

2) 中国人を排除する風潮への対抗

2025年3月24日に参議院で某政党の議員A氏が博士課程学生支援制度「次世代研究者挑戦的研究プログラム」(SPRING)について質問しました。このプログラムは会員の皆さんの中にも受給者が多くおられるかと思います。国費から年間最大290万円を支給するもので、次世代の研究者を育成するための、教育行政（文部科学省所轄）の施策のひとつです。ところがA氏の質問は文教科学委員会ではなく、外交防衛委員会でなされました。当該委員会の議事録（当該URLを記載すると長くなるので、国際会議検索システムから日付を入れて検索してください）によると、A氏はSPRING受給者に占める外国人留学生の割合を質しました。文部科学省担当者の答弁によれば、2024年度受給者は10,564人、そのうち外国籍者は4,125人、中でも中国籍は2,904人だとのことです。A氏は続けて東京大学・京都大学・東京工業大学（現在は東京科学大学）の中国人留学生が全留学生に占める割合の変化をグラフで提示し、この問題について国防の観点から文部

科学省の見解を訊ねたということです。

某党及びA氏が「外交防衛委員会」でわざわざこのことを取り上げて話題にしたのがなぜなのか、会員諸氏には見当がおつきでしょう。私はこの記事を読んで慄然としました。国会という場でこれを問題化し、国民に向かって「あなたがたの税金が、よりによって中国人に知識と技術を伝授するために使われているのだぞ」と声高に叫びたいのでしょう。この文章は理事長就任挨拶なので個人的な政治信条を語るのは控えます。しかしながら学会の責任者としてこうした風潮には懸念を示しておきたいです。

そもそも外国籍者が全学生の4割となった理由の1つは、日本国内における研究者への経済的冷遇、いわゆる「高学歴ワーキングプア」問題が日本国籍の若い人たちを博士課程進学から遠ざけていることにあります。それを留学生増加問題にすり替える意図が透けて見え、ひとりの大学教員としても甚だ不快に感じます。

本学会で近年の新規入会者や大会発表者の多くが外国籍で、その大半は中華人民共和国の国籍保持者であることは皆さんご存知のとおりです。日本中国学会を冗談めかして「日本で中国人が発表する学会」と言い換える向きもあります。私は一方では日本国籍の大学院生が減少している傾向を憂慮しつつも、外国籍の入会者が増えて大会の場で自分たちの研究発表を積極的にしてくれていることを嬉しく思っています。日本経済が衰退し、30年前とは打って変わって今や中国・台湾・韓国の後塵を拝する状況となり、学術界でも国際的な存在感が薄らいでいます。そうした中、中国文化の研究を主眼とする本学会に日本で学ぶ留学生が多数加入していることは、日本における斯学の声誉がなお保たれていることの証でしょう。留学生の皆さんは母国の学術とは違う日本独自の研究手法や論文作法を修得してくれているわけです。将来日本の大学で教えるにせよ、母国に戻って自国の学生に教えるにせよ、このようにして日本の学風が伝授・継承されていくならば、その担い手の国籍を云々する必要はないと考えます。A氏の質問は大変遺憾であるとともに、日本国民がこれに踊らされることがないよう願っています。

すし、理事長としてそのための言論発信をしていこうと決意しています。

3) 国際的学術大会への協力

最後に2つの国際的学術大会に言及しておきます。

ひとつは2026年11月28日・29日に東京大学で開催予定の「東洋学・アジア研究連絡協議会第1回国際会議：古典学からの挑戦」です。これは国際アジア・北アフリカ研究会議（ICANAS）が2007年以来機能不全に陥っている状況に対処すべく、日本の東洋学・アジア研究連絡協議会が主催して独自に行う国際会議です。本学会はこの協議会の主要メンバーのひとつであり、応分の協力を要請されました。すでに学会ホームページで分科会の企画を呼びかけて応募を受け付け、審査のうえ連絡協議会に推薦しました。会議の詳細が発表されたらリンクを学会ホームページに貼るつもりですので、ぜひご参加ください。

もうひとつは2028年8月にこれも東京大学で開催予定の「第26回国際哲学会議」です。オリンピック同様、4年ごとに各国持ち回りで開催される国際大会で、招聘元は日本哲学系諸学会連合（JFPS）。本学会はこの連合にも創立当初から参加しています。もっとも他の加盟学会（日本哲学会・日本印度学仏教学会など）と異なり、本学会の会員の過半は「哲学系」ではありません。しかしながら、中国の学術に元来「哲学・文学・史学」などという区分は存在しなかった（？）のであり、本会あげてこれに協力していく所存です。この点もよろしくご理解ください。

私ごときが言うまでもなく、日本は中国から古来多くのことを学んで歴史を紡いてきました。両国間には不幸な戦争経験があり、現在もまた政治的に必ずしも友好的とは言い難い状況ですが、隣国という地勢は変えようがありません。私たちのこの学会が文化研究を通じて、学界内部のみならず広く社会一般に相互理解と平和共存の方途を示す役割が果たせることを念じ、この挨拶を締め括させていただきます。皆さんのご協力をお願いします。

台湾大学中国文学系に滞在して

鳥谷まゆみ

北九州市立大学

2025年9月末、私は台湾大学より北九州市立大学に帰任した。前年春から勤務校の在外研修制度を利用し、台湾大学文学学院中国文学系に「訪問学者」として滞在し、のちに外交部「訪問學人」として、計一年半、子どもと台北北部で生活した。主任の劉正忠教授によると、私は中文系創立以来、在籍期間最長の訪問学者だという。劉教授は折に触れて、満面の笑みでどのように私を周囲に紹介してくださった。2024年秋に創立80周年を迎えた中文系の歴史の一端に加わったことは光栄であった。現代中国の散文・詩歌の研究者である劉教授は、拙論（2016年）を通じて私のことを知ってくださっていたことを契機として、共通の知人を介した打診を受け入れてくださった。こうして台大中文系で20世紀中国および台湾の散文ジャンルの研究を開始した。劉教授は詩人「唐捐」としても活躍されている。多忙な中、温かく接してくださった劉教授から頂戴した「最長記録」の称号は、台湾でも育児に追われていた身としては少なからずプレッシャーでもあったが、お世話になった中文系の教職員の皆様に深く感謝している。今後、研究・教

育の面から少しづつ恩返ししていきたい。台大中文系では、実に多くの貴重な経験をさせていただいた。本稿では、その一部として、講演会と授業に関する個人的な経験を紹介したい。

■講演会

台大中文系では年間を通じて多くの講演会やシンポジウムが開催されている。国内外の著名な研究者による講演が頻繁に行われた。多い時には週2回、学期はじめなど学生で賑わう時期には、午前と午後の2回行われることもあった。講演会の主な種類は次の通り。学科専任教員による講演（毎月2回）、訪問学者による講演（滞在期間中2回）、各種研究プロジェクトに基づく講演（毎月4～6回）、大学共通「國文」科目に基づく講演（毎学期10回）、そして国際学術シンポジウム（姉妹校との共同開催：年1回、各教員の研究に基づく講演：年1～4回）である。

このほか、「台大文学獎」招待講演、「曾永義學術講座」、「潘寶霞女士講座」（各年2～3回）などもあり、その活動の豊富さが窺える。講演テーマは古典文学、近現代文学、経学、思想、言語教育など多岐にわたっていた。私も自身も訪問学者として、「中國近三百年文學專題」（梅家玲教授主管）の一環として講演を行ったほか、次の講義においてもテーマに沿った講演を実施し、また台大中文系で開催されたシンポジウムにも登壇した。「華語視界與中國文學」（高嘉謙教授主管）、「東亞文學與文化」（梅家玲教授主管）、「越境：近世東亞的文藝交渉與政治互動」（劉柏正教授主管）、「中國近現代報刊探索與研究」（蔡祝青教授主管）。講義内で開催された講演会では、中文系の各教員がまず私を紹介し、講演後にはコメントを寄せてくださった。聴衆は学部生・研究生を中心とする台大的学生のほか、一般の方々もおり、様々な質問が出された。

中文系主催の講演会では、冒頭で劉教授が挨拶を行い、講演後には宴会が開かれるのが常であった。宴会では、教授陣と演者を囲んで料理を楽しみつつ、研究や教育、学務の話題に花を咲かせた。こうした交流の場から、新たな学術・教育交流の企画が立ち上ることも屡々あつ

た。講演や宴会のスタイルは、清華大学、東吳大学、中山大学で講演した際も概ね同様であったが、気心の知れた教授陣との宴会では緊張せずに過ごせた。中文系主催の講演会は、最新の研究に触れつつ、国内外の研究者と交流できる、まさに贅沢な場であった。

■授業「國際學生學士班・共授課」

2024年春学期、私は台大中文系のオムニバス形式の講義「國際學生學士班・共授課」(以下、「國際班」及び「共授課」)の担当教員の一人として教壇に立った。「合授課」とも称される本講義は、2008年に創設された留学生向けの「國際班」の授業の一環として学際的に開講され、留学生の中国文学・文化への理解を深めることを目的としている。私が担当した約20名のうち半数はネイティブ並みの語学力を有し、アジアや欧米など多様な背景を持っていた。

講義名は「東亜越境文學與文化」とされ、講師陣は余筠君教授、劉正忠教授、韓知延教授(韓国・中央大学)、そして私の4名であった。台大では、専任教員と外国人研究者が共同で授業を実施するには、学科や教務処の承認、教育課程運営委員会の審査など複数の手続きを経る必要がある。本講義もそれらを経て2024年春頃に正式に開講が決まったようである。私が訪問学者としての手続きのため台大に来た当日、到着の挨拶も終える間もなく最初の打ち合わせが始まり、数日後にはシラバスを提出するよう求められた。来台直後で「國際班」の存在も知らなかつた私は、教授方の熱意に支えられ、「越境」をテーマとする3回分のシラバスを作成した。

講義内容の詳細については稿を改めるが、その特色はテーマ「越境」の歴史を軸に、多国籍の教授陣が各自の専門テクストを用いて文化・人・文学の移動を示すことにより、受講生が単一の文化観に依存せず、批判的思考力を身につけられるようすることを目指した。中文系での外国人研究者との協働授業は初の試みであり、学期末レポートや発表からも学生の関心が高まったことが窺えた。「共授課」は、講師陣にとっても学問的協働を試みる実験的な場であり、異なる国の研究者が共同で講義を

企画・実施するという、新たな学術交流の形を提示するものであった。さらに、この取り組みは、国際的な連携の可能性を確認する機会ともなった。特に、中文系両教授の的確な指導と調整のもと、講義を円滑かつ実り多い形で終えることができたのは、台大中文系の強固なチームワークに支えられた成果である。

以上、台大中文系滞在中の経験のうち、ごく一部を記したに過ぎない。講演会や「共授課」をはじめ、学期ごとの交流会や台静農記念館の開館イベントなど、各種行事に参加させていただいた。台中や龜山島への懇親旅行にも家族で参加した。帰国直前の送別会では、教授陣が動画やアルバムを作成してくださった。この場を借りて、主任の劉正忠教授をはじめ、中文系の教職員の皆様に改めて感謝申し上げる。台湾大学中文系での貴重な経験を、今後の研究と教育に確実に生かしていきたい。



台湾大学文学院

海南省第二回東坡文化国際論坛に参加して

柴田
寿真

早稲田大学

2024年11月8日から10日にかけて、中国海南省の海南大学において第2回海南省東坡文化国際フォーラム（海南省第二回東坡文化国際論坛）が開催された。本フォーラム（以下、大会）は、海南大学海南省東坡文化研究与伝播中心および同大学人文学院の共催によるもので、「東坡文化の世界的伝播と歴代受容」をテーマに行われた。参加者は中国各地をはじめ、日本、ロシア、韓国、ベトナムなど多国に及び、国際大会の名にふさわしい幅広い顔ぶれが揃った。日本からは浅見洋二（大阪大学）、内山精也（早稲田大学）、松尾肇子（立命館大学）、加納留美子（相模女子大学）、原田愛（金沢大学）、鄭玲玉（立命館大学）と筆者の七名が参加した。

第1回大会（2023年2月18日）は「東坡文化の時代的価値と世界的意義」を主題に掲げ、約200名が参加する大規模な国際会議であった。これに対し第2回は、その成果を踏まえつつ先述の「東坡文化の世界的伝播と歴代受容」に焦点を絞り、参加者をおよそ100名に限定した中規模大会として開催された。主催が掲げた精品化（規模の精選）・専題化（議題の特化）・平台化（研究交流の

プラットフォーム化）という三方針は、研究の方向を量から質へと転換させる意図を明確に示していた。

まず到着して印象的だったのは、会場となった海南大学海甸校区の美しい環境である。熱帯樹木の中に湖と小橋が点在し、南国らしい陽光のもとで緑と水が調和する風光明媚なキャンパスであった。空港から大学へ向かう車中で、海南大学の王睿先生が「今が一年で最も過ごしやすい時期です」と話してくださいましたが、その言葉通り、当日の気温は25度前後で、11月とは思えぬほど心地よく穏やかな気候であった。そのような南国の空気の中で、大会は熱気を帯びて進行した。

本大会は思想哲学・文献考証・文学芸術・伝播受容の四つのテーマに沿って分科会が構成され、具体的な作品分析や思想的背景の検討から東坡文化の海外受容や文献考証に至るまで、多彩な研究成果が紹介され、東坡文化研究の広がりと深まりを実感することができた。

各分科会は限られた時間の中で進行し、討論や質疑応答は設けられなかったが、その分、報告者は要点を明確にし、聴講者はさまざまな視点を立て続けに聞くことができた。形式的な討論がない分、ティープレイクの時間が自然な交流の場となり、分科会を越えて研究者同士が語り合う姿が見られた。研究発表と交流とが、穏やかに交わりながら大会の雰囲気を形づくっていた。

滞在中は、会場でもある大学の海南大学国際学术交流中心酒店に宿泊した。大学東門のすぐ右手に位置し、早朝、部屋の窓から見える東坡湖が美しかった。学内施設として整備されたこのホテルは、宿泊と会議場が一体化し、移動の負担もなく終日快適に発表に臨むことができた。朝食や夕食ではレストランで参加者が自然に顔を合わせ、発表の延長として意見交換や情報共有が活発に行われた。研究の話題をきっかけに、文化や生活の話まで広がり、学問と人とのつながりが一続きのものとして感じられる有意義なひとときであった。

現地での運営体制もきわめて丁寧で、とりわけ王睿先生は、空港での出迎えから閉会後の文化視察まで、終始日本からの参加者に心を配ってくださいました。この場を借りて心より感謝を申し上げたい。発表当日は司会進行や

時間管理が徹底しており、規模の割に大きな遅延もなく進行した。

さらに印象的だったのは、情報共有の徹底である。開催の一か月前には、主催者が微信 (WeChat) 上に専用グループを開設し、宿泊や送迎、発表順などの連絡が即時に共有された。個々の問い合わせや調整もこの場で行われ、参加者全員が進行の全貌を把握できる体制が整えられていた。やや「筒抜け」ともいえるほどの透明性であったが、それがむしろ信頼関係を生み、主催側の負担を分散していた。大会後もグループは存続し、海南大学や蘇東坡研究に関する情報交換が続いたことも余韻として心に残った。

大会の最終日には、海南島における東坡文化の現地的展開を理解するための文化観察が実施された。早朝、前日まで大会運営に尽力されていた王睿先生の引率で、日本からの参加者一行（原田先生はフライ特の関係で惜しくも不参加）に、南京大学の卞东波先生を加え、二時間ほどバスに揺られて儋州市へ向かった。最初に訪れたのは、蘇軾が流刑中に居住したと伝えられる東坡書院である。11月にもかかわらず書院の池には蓮の花が咲いており、南国の気候を肌で感じた。大陸とは全く異なる自然の有様を目の当たりにし、それを詩にうたわざにはいられなかった詩人の心が、少し理解できた気がした。

続いて、蘇軾が海南島時代に一時住んだ桄榔庵を訪れた。桄榔庵は東坡書院から 2 キロほどのところにある。訪問当時はまだ竣工中であったため、その全容は知り得なかったが、現在はすでに「桄榔庵蘇東坡記念館」として完成しているという。

海南島における蘇軾の詩の中でも、北帰の途上に海のかなたの大陸本土を望んで「青山一髪是れ中原」と詠じた「澄邁駅通潮閣」の詩は特に有名である。我々としてはその通潮閣の跡をぜひこの目で確かめたいと願ったが、残念ながら遺跡は現存していなかった。ただ、澄邁県老城鎮の一角には「澄邁東坡歩行街」と刻まれた牌坊が立ち、通りには蘇軾像が設けられ、地元の人々や観光客で賑わう飲食街となっていた。これには美食家・東坡先生も喜ぶに違いない。ところが今年（2025年）になって澄邁県の考古調査の結果、通潮閣の比定地が報告された。

調査によれば、水辺の小高台から火山岩質の残碑が出土し、その碑文の内容や地形等との照合から、この場所こそ通潮閣の遺跡である可能性が高いという。このように海南島では今も東坡ゆかりの遺跡の復元が着実に進められており、おそらく近い将来、通潮閣も再び姿を現すに違いない。文学の記憶が現地の文化振興とともに息づいていることを強く印象づけられる観察であった。

総じて、今回の大会は、東坡文化の時空の広がりを主題としていたが、開催地である海南島は、まさにその広がりの原点の一つに位置づく土地であり、テーマと開催地が自然に呼応する構図となっていた。文化観察で訪れた東坡書院や桄榔庵、澄邁の風景に触れ、書物の中でしか知らないかった東坡の世界が、土地の空気の中に確かに生きていることを感じた。現地でしか得られない手応えに満ちた大会であった。



四川大学王兆麟教授による開幕式のあいさつ



文化観察で訪れた東坡書院

中国古典小説研究会・
公開シンポジウム
「中国古典小説のここが
面白い！」実施報告

上原
徳子
立命館大学

い！」第1回〈研究者、推し作品を語る〉を開催した。続いて、2025年9月14日には東京大学において、2025年度大会特別企画・公開シンポジウム「中国古典小説のここが面白い！」第2回〈研究者、推しキャラクターを語る〉を開催した。

両シンポジウムの発表者およびそれぞれの「推し」は以下のとおりである。

第1回「研究者、推し作品を語る」(所属は当時のもの)
上原徳子(立命館大学):『紅樓夢』
竹内真彦(龍谷大学):『三国志演義』
井口千雪(九州大学):『三国志演義』
二階堂善弘(関西大学):『封神演義』
中塚亮(愛知淑徳大学等・非):『封神演義』
上原究一(東京大学):『西遊記』

松浦智子(神奈川大学):『楊家将』

佐高春音(大阪大学):『水滸伝』

小松謙(京都府立大学):『水滸伝』と『説唐全伝』

第2回「研究者、推しキャラクターを語る」

中塚亮(愛知淑徳大学等・非):聞仲(『封神演義』)

田村彩子(京都府立大学等・非):孫臏と龐涓(『列国志伝』ほか)

千賀由佳(龍谷大学):白蓮岸(『帰蓮夢』)

田中智行(大阪大学):応伯爵(『金瓶梅』)

李沫(京都府立大学学術研究員):林黛玉(『紅樓夢』)

永井もゆ(日本学術振興会特別研究員PD):王伯当(『説唐』ほか)

小松謙(京都府立大学名誉教授):石秀(『水滸伝』)

佐高春音(大阪大学):李逵(『水滸伝』)

上原究一(東京大学):張飛(『三国志演義』)と尉遲敬徳(『隋唐両朝史伝』ほか)

本シンポジウムの企画意図は、中国古典小説を愛好する一般読者と研究者とをつなぎ、一人でも多くの人の中国古典小説への関心を喚起し、新たな読者層を開くことにある。

中国古典小説研究会は、その名称のとおり、中国古典小説を研究対象とする研究者によって構成されている。会員がそれぞれどのような動機で中国古典小説を研究対象として選んだかは様々であろうが、少なくとも研究対象と出会った際に、何らかの知的な魅力や興奮を覚えた経験があったに違いない。このような研究者一人ひとりの関心や感動の原点にこそ、中国古典小説の豊かさと現代的意義を伝える力があると考えた。

以上の見解をふまえ、本企画は、本報告者(上原徳子)が発案し、研究会幹事の賛同を得て実施に至った。企画構想にあたり念頭に置いたのは、研究者自身が抱く「熱」を研究者以外の人々にも伝えたいという思いであった。そして、この「熱」をあえて現代的な言葉で「推し」と表現し、親しみやすさを演出するとともに、より広い層にわかりやすく伝えることを目指した。

構想段階では、発案者は、登壇者がそれ自らの専門外の作品を取り上げて語ることで、新鮮な視点が得られるのではないかと考えていた。しかし実際には、登壇者が選んだ作品やキャラクターはいずれも、日頃から研究対象としているものであった。この点から多くの会員が自ら心から愛する作品を研究対象として日々向き合っていることを改めて確認する機会となった。

第1回シンポジウムには、オンライン参加268名（会員18名・一般250名）、会場参加47名（会員18名・一般29名）の計315名から申し込みがあった。当日は、オンラインで常時140名台半ばから160名程度が参加し、会場には約40名が来場した。

続く第2回シンポジウムでは、オンライン参加209名（会員19名・一般190名）、会場参加76名（会員26名・一般50名）から申し込みがあり、当日もオンラインで約140名が参加し、会場には約70名が来場した。また、加えて参加申込者に限り期間限定で当日の動画をアーカイブ公開したところ、視聴回数は236回に達した。さらに、両回とも参加者アンケートを実施し、多くの回答を得た。これらの結果は、今後のシンポジウムの運営方針を検討する上で有用な資料となるとともに、中国古典小説に対してどのような関心が寄せられているのかを示す貴重なデータとなっている。

参加者の内訳をみると、オンライン参加者が非常に多いことが特徴である。また、アーカイブ動画の視聴回数も一定数に上っており、参加形態の多様化が進んでいることがうかがえる。

また、シンポジウム開催に先立ち、SNSを活用した情報発信も行った。発信内容においては、登壇者の情報や「推し」の対象に加えて各作品の理解を助ける専門的な知識を紹介し、一般参加者が当日までに一定の基礎知識を得られるよう工夫した。こうした事前の取り組みにより、関心を喚起しつつ参加へのハードルを下げることができたと考えられる。オンライン参加の導入とSNSを通じた広報活動は、一般参加者数の増加に大きく寄与した要因であり、今後も一層の改善と工夫を重ねていきたい。

さらに、シンポジウム後には、一般参加者を含めた懇親会を実施した。そこでは、通常の学会懇親会とは異なり、参加者同士が「好きな小説」について自由に語り合い、研究者と一般読者が立場を超えて交流する貴重な機会となった。一般参加者から直接寄せられた感想は、発表内容のわかりにくかった点や伝え方の改善点を把握するうえでも有益であり、今後の発信の在り方を考える上で示唆に富むものであった。

発表後の質疑応答の中では、日本語訳の有無に関する質問が寄せられた。研究の場では、原典を直接読解することが求められる場合が多いが、一般読者の裾野を広げるためには、日本語訳の存在が不可欠である。現状では、日本語訳が存在しない作品も少なくなく、今後、より多くの中国古典小説が翻訳され、「娯楽」として親しまれることが期待されるが、最新の研究成果を反映した翻訳を提供するには、専門的知見の集約や出版環境など、なお多くの課題が存在しており、容易なことではない。それでも、中国古典小説の日本語訳を通じて新たな読者を獲得し、学術研究の成果を社会へ還元していくことは、今後ますます重要な課題となることが今回の企画を通じて改めて明らかになった。

以上の成果と課題を踏まえ、本企画は今後も継続して実施する予定である。第3回は雑劇をテーマに、2026年3月15日に開催を予定している。詳細は、中国古典小説研究会の公式HPおよびSNSにて順次告知する。引き続き、多くの方々にご参加いただき、登壇者と参加者が共有する「熱」を実際に感じ取っていただければ幸いである。



第2回公開シンポジウム質疑応答時の様子

二〇二五年度日本中国学会賞について

今年度の学会賞は、以下の3名であった。

- ・孫楊洋会員〔文学・語学部門〕。対象論文は「『諧聲品字箋』に與えられた翼—「正音」字書として讀まれた歴史—」(『学会報』第76集)。
- ・永井もゆ会員〔文学・語学部門〕。対象論文は「『隋唐演義』後三十四回の成立について—『資治通鑑』との比較から—」(『学会報』第76集)。
- ・劉欣佳会員〔日本漢学部門〕。対象論文は「中井竹山『詩律兆』考—その歴史的意義を中心に」(『学会報』第76集)。

2025年10月13日（月）、九州大学伊都キャンパスで開催された第77回大会の総会において、授与式が行われた。各会員の受賞の挨拶は、以下の通りである。

孫楊洋氏

このたびは、栄誉ある日本中国学会学会賞を賜り、誠にありがとうございます。査読をお引き受けくださった先生方、論文審査委員会及び出版委員会の先生方、そして本論文をご推挙くださいました先生方に、心より厚く御礼申し上げます。

受賞論文では、明末清初の杭州人虞徳升が上梓した「正音」の字書『諧聲品字箋』が、いかに読まれ、理解されてきたか、その受容の歴史について論じました。近世において、「字書」は正音を謳いながら方言とは不可分の関係にありましたが、それでも、単なる言語記録としてではなく、人々に実際に読まれ、それぞれの文脈に応じて理解され、時には誤解されつつも、積極的に利用される存在でした。その一つの典型として、私は『諧聲品字箋』を取り上げました。このように字書が有した読み物としての側面には、まだ注目すべき点が多く残されていると考えております。

執筆にあたっては、指導教員である木津祐子先生から終始丁寧なご指導を賜りました。本論文の一部は、2023年の日本中国学会第75回大会において口頭発表し、その

際には出席された先生方および学友の皆様から、貴重なご助言を賜りました。さらに、『日本中国学会報』への投稿後も、査読者の先生方より大変有意義なご指摘をいただきました。そして、京都大学中文研究室の先輩や友人たちの、多くの有益な意見や激励の言葉も忘れることはできません。

このような多くのご助言・ご支援のもとで論文を完成することができましたことに、改めて深く感謝申し上げます。それと同時に、今回の受賞は身に余る光栄と、襟を正す思いであります。今後も未熟な点を一つずつ乗り越えながら、より一層研究に励んでまいります。この度は、誠にありがとうございました。

永井もゆ氏

このたびは学会賞にご選出くださり、誠にありがとうございます。本論文の査読や賞選考に関わってくださった皆様に感謝申し上げます。執筆時は、当時京都府立大学でご指導いただいていた小松謙先生、また査読の先生方からも有意義なご意見を多く頂戴しまして、より良い形で論文を掲載することができました。ありがとうございました。また、学部時代、神戸市外国語大学で、研究者とは何たるかを教えてくださった紺野達也先生、修士以降、至らない後輩でも優しく見守り導いてくださった京都府立大学の先輩方にも、この場を借りて感謝申し上げます。この受賞を励みに、日本中国学会、また本邦における中国研究の更なる発展に貢献できるよう、一層精進して参ります。このたびは誠にありがとうございました。

劉欣佳氏

このたびは、日本中国学会賞という大変光栄な賞を賜り、身に余る思いでございます。心より御礼申し上げます。今回の論文は、決して私一人の力では成し得ませんでした。常に温かく、専門的なご指導のみならず、人と

してのあり方までさまざまに教えてくださった、私の指導教授である早稲田大学の内山精也先生に、まず深く感謝申し上げます。本論文執筆年の大晦日にも、Zoomで一緒に問題点を検討してくださった先生のお姿は、今も鮮明に心に残っております。また、日本の近世文学をご指導くださった早稲田大学の中嶋隆先生、漢籍や和書の知識やその扱い方について教えてくださった慶應義塾大学の高橋智先生、佐々木孝浩先生、堀川貴司先生にも、心より感謝申し上げます。さらに、日頃より温かく助言してくださる早稲田大学内山ゼミの皆様、そして本研究で多く使用した懐徳堂や中井竹山に関する貴重な資料や先行研究を公開してくださった大阪大学の皆様にも、改めて深く御礼申し上げます。

本研究を通して改めて感じたのは、日本漢文学という学問には、日本という国の枠を越え、東アジア漢字文化圏全体に通じる豊かな知の蓄積があるということです。今後は、こうした広い視野を大切にしながら、日本漢学の成果をより広い文脈の中で位置づけていけるよう、一層努力してまいります。

このたびは誠にありがとうございました。

各種委員会報告

【大会委員会】

委員長 伊東 貴之

(1) 第77回大会について：

日本中国学会の第77回大会は、2025（令和7）年10月12日（日）・13日（月・祝日）の両日に亘って、九州大学・伊都キャンパスにおいて、盛会裡に開催されました。大会準備会の代表は、九州大学の東英寿会員が務められました。全面的な対面での開催は、一昨年の大阪大学、昨年の二松学舎大学に次いで、3年目を数え、漸くコロナ禍が終息して、平生に復した感覚を持たれた参加者の方々も多かったものと思われます。今夏は、全国的にも、例年ない酷暑の日々でしたが、開催当日は、30度を超える暑さではあったものの、お蔭様で、秋空と申してもよい、爽やかな天候で迎えることが叶いました。

さて、ご記憶の向きも多いかも知れませんが、昨年度の二松学舎大学における大会の会員総会に際しても、東会員より、「伊都キャンパスは『三国志』魏志において、邪馬台国へのルートとして登場する伊都国に由来する土地であり、ここに移転した九州大学に是非、お越し戴きたい」旨の御挨拶がございました。伊都キャンパスは、最寄り駅である九大学園都市駅から、かなりの距離があり、アクセスの点で、些かご心配された向きもあった模様ですが、九州大学の大会準備会におかれでは、何便ものバスをチャーターするなど、開催に際して、文字どおり、至れり尽くせり、様々なご高慮やお心遣いを賜りました。この点、東英寿会員をはじめとする九州大学の関係者の先生方、また、諸々のお手伝いを戴いた院生諸氏には、大会委員長としても、この場を藉りて、衷心より深甚の感謝の意を表させて頂く次第でございます。

キャパシティー上の利点をも活かして、今回は、基本的に、全ての発表希望者の方々のご発表をお認めされて、全6会場にて、総計73件の研究発表が行われました。他にも、書評シンポジウムが2件、次世代シンポジウムが1件という壮観ぶりで、この点においても、筆者の知り

得る限り、空前の規模での開催であったものと思われます。なお、大会参加者は、総計で295名（うち事前にQRコードでお支払いをされた方が、250名、当日、現金でお支払いされた方が、45名）、また、懇親会の参加者が、161名（うち当日の申し込みが、37名）との由で、やはりかなりの盛会であったことが裏付けられます。その他、託児サービスの提供なども含めて、大会アンケートにおいても、総じて好意的・肯定的なご意見が多かったように拝察を致しております。また、オンラインとのハイブリッド開催やオンラインによる資料提供などを望むご意見も多々ございますが、此方に關しては、開催校の負担も大きい上に、様々な懸念点もあるため、引き続き、諸般の状況を鑑みながら、デジタル化推進委員会の方で、ご検討を重ねて戴くという仕儀になっております。

（2）「九州大学100年の中国学研究」の展示について：

2025（令和7）年10月6日（月）～11月28日（金）の日程で、九州大学・伊都キャンパスのフジイギャラリーでは、「九州大学100年の中国学研究」が開催され、本学会大会の期間中にも、多くの会員が参観されました。因みに、この企画は、元来、まさに日本中国学会大会の開催を記念して企画されたものと伺っておりますが、九州大学図書館が所蔵する中国学や日中交流に関連する様々な文献や研究資料、貴重な墨蹟や稿本などが、一堂に展示されました。

取り分け、特に「九州大学本」として、夙に斯界でも認知されている貴重書である、朝鮮古写本『朱子語類』140巻、古典小説・三国志演義の貴重な版本『三国志伝』20巻などは、専門の研究者であれば、よく知られたものですが、実際に目睹する機会には、なかなか恵まれるものではありません。加えて、唐の玄宗皇帝の肉筆を唯一、現在に伝える「紀泰山銘」の拓本（拓本自体も既に百年近い由緒を持つものとされます）、今も中央図書館に掲げられている、開学の翌々年（1913年）に来訪した孫文の揮毫「学道愛人」、更には、医学部に学んだ文豪・郭沫若による「实事求是」の額（1955年に講演を行った際の染筆）なども、それぞれ雄渾な筆致で、なかなかの圧巻で

した。なかでも、此度、新たに重要文化財の指定を受けた、国語学や訓点学の権威で、春日政治・和男両名誉教授旧蔵の「金光明最勝王経」は、日本中国学会の開催に合わせた、期間限定での特別公開でもあり、この機会に眼福に浴した会員も多かったものと思われます。展示された品々の由来などについては、初日のお昼休みを利用して、九州大学の静永健会員によるギャラリートークも行われました。

もっとも、筆者などには、同時に展示されていた品々のうち、九州大学の中国学、否、日本の中国学を力強く牽引された高名な先学の先生方、哲学・思想分野では、楠本正継先生（1896～1963）を筆頭に、楠本門下の双璧とされる、岡田武彦（1908～2004）、荒木見悟（1917～2017）の両先生、文学・語学分野では、日加田誠（1904～1994）、瀬一衛（1909～1984）、岡村繁（1922～2014）の諸先生など、文字どおり、錚々たる斯界の巨匠たちの遺愛の遺品や存外、丹念で几帳面な文字で細々と記されたノートやカードなども、殊の外、脳裏に焼き付いております。

（3）来年度以降の大会について：

2026（令和8）年度の第78回大会は、10月11日（日）・12日（月）の両日に亘って、北海道大学において、開催されます。大会準備会の代表は、北海道大学の近藤浩之委員がお務めになる予定です。会員総会では、近藤委員より、この季節には、北海道では、既に肌寒いくらいの気候になる点、ご留意されたい旨のご発言がございました。

なお、従前は、本学会の大会は、多くの場合、10月10日・11日の両日の開催となっていましたが、今年度の九州大学のケースと同様、北海道大学におかれても、入試関係の公務との関連で、日程の変更を余儀なくされた由でございます。

因みに、現時点では、再来年度、2027（令和9）年度の第79回大会は、京都の龍谷大学にお願いすることで、既にご内諾を頂戴しております。

【論文審査委員会】

委員長 小松 謙

○学会報第77集応募論文の審査の経緯

- ・2025年1月15日（消印有効）締め切りの応募論文は全53篇（哲学・思想部門16篇、文学・語学部門27篇、日本漢学部門8篇〔ただしうち1篇は哲学思想部門とあわせての審査を希望しているため、同部門16篇に含まれる〕、歴史部門5篇〔ただしうち2篇は哲学・思想部門とあわせての審査を希望しているため、同部門16篇に含まれる〕）であった。2月2日に東京大学において第2回委員会を開催し、1篇につき2名の査読委員と、論文審査委員会委員の中から1名の閲読委員を決定した。
- ・3月22日に東京大学で開催した第3回委員会において、査読委員2名・閲読委員1名の査読結果をもとに、哲学・思想部門4篇、文学・語学部門12篇、日本漢学部門2篇、歴史部門1篇の計19篇を修正の上掲載する方向性を定めた。なお、この19篇はすべて適切な修正を経て、第77集に掲載された。

○第3回委員会におけるその他の決定事項

- ・学会報第78集依頼論文執筆候補者（評議員2名、一般会員2名）を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・文学・語学部門2名、日本漢学部門1名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・投稿者が論文を電子媒体により投稿できるようにすることについて検討し、可否について理事会に検討を依頼することになった。なお、この件は理事会で承認されたため、2026年度以降、電子媒体による投稿を可能とする方向で、2025年度新たに発足した委員会において、その方法や投稿規定の文言について検討中である。
- ・評議員からの日本中国学会賞の推薦が少ないため、評議員会において、積極的な推薦を依頼することとした。
- ・幹事の業務が過重なため、一名の増員を理事会に提案することとした。なお、この件は理事会で承認され、2025年度からは幹事2名体制に移行している。

【デジタル化推進委員会】 委員長 柳川 順子

はじめまして。このたび発足したデジタル化推進委員会です。本委員会は、2023年度、理事会における将来計画特別委員会からの提言に発し、各種委員会検討作業部会での議論を経て創設されました。

将来計画特別委員会では、数年来、本学会が抱える諸問題について検討が重ねられてきました。また、コロナ禍中で開催された学会大会に関するアンケートでは、会員の皆様から様々なご要望やアイデアをお寄せいただきました。そうした中から浮上してきたのが、本学会におけるデジタル化の推進という課題です。本委員会は、学会の活性化をデジタルツールによって支えることを職務とします。

現在、次のような取り組みを行っています。まず、将来計画特別委員会で試行版を作成してきた「会員論著目録」について、これを軌道に乗せるべく準備を進めています。それに関しては、本便りに小島理事長からの依頼文が掲載されていますので、ご一読の上、ご協力くださいますようお願いいたします。また、学会公式SNSの発足、大会発表資料の事前オンライン公開（会員限定）、大会のハイブリッド開催に関するアンケートの実施に向けて、検討を重ね、関係する委員会との調整を進めているところです。大会開催校、発表者、参加者の三方に、できるだけ負担のかからない方法を模索しています。

今後、皆様には様々な局面でご協力をいただくことになろうかと存じます。何卒よろしくお願い申し上げます。

2025年度 会員動向／新入会員一覧

●会員動向（2025年10月1日現在）

総会員数1,475名、準会員数43機関、賛助会員数13社

杜 沢宇 九州大学（院）

金 肇新 九州大学（院）

汪 哲 九州大学（院）

小齊平 慎 九州大学（院）

郭 文豪 九州大学（院）

劉 慶 奈良大学

佐野 由枝 九州大学（院）

苗 婪 島根県立大学

唐 芷寒 大阪大学（院）

肖 悅 東京大学（院）

鄭 德嶽 東京大学（院）

●退会会員

○退会申出会員（昨年度第3回理事会承認分） 12名

石井 望 叢 小榕 田中 文雄

劉 慶 奈良大学

利波 雄一 中原 健二 中村 昌彦

佐野 由枝 九州大学（院）

西川 靖二 白 蓮杰 原瀬 隆司

苗 婪 島根県立大学

藤井美恵子 保苅 佳昭 他1名

唐 芷寒 大阪大学（院）

○退会申出会員（今年度第1回理事会承認分） 4名 + 1社

石原 伸一 張瀛子 長堀 祐造

肖 悅 東京大学（院）

吉井 和夫 燐原書店

鄭 德嶽 東京大学（院）

○退会申出会員（今年度第2回理事会承認分） 9名

市原 里美 章 劍 新免 恵子

なお、以下の方々については3月31日、6月7日付で開催された臨時評議員会（メール審議）において入会が承認され、すでに今年度の会員名簿に掲載されています。

曾 小蘭 土田 秀明 天神 裕子

●通常会員 39名

福田 哲之 廖 伊庄 鮎澤 彰夫

楊 一鳴 安藤 直哉 洪 信慧

○4年間の会費滞納による退会会員 30名

孫 平 劉 玉潔 顧 涵悦

●住所不明会員 18名

王 秋琳 本岡真由子 李 慕遥

池田 智幸 市村俊太郎 成 高雅

房 惠鳴 中西 望月 姚 依平

臧 魯寧 滝野 邦雄 田中 邦博

鹿島 倭太 楊 柳 李 春潤

張 欣 陳 曉淇 陳 駿千

黃 嘉欣 李 欣霜 劉 如玉

陳 路 西口 智也 樊 致遠

納 玥 王 潔 黃 祖恩

正岡 知晃 安本 武正 楊 洋

蔡 婕 徐 正丁 陳 雨萌

藍 莫雅 李 岳陽 編本 誠

明田川聰士 阿久津光貴 劉 書鉢

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください。

渡邊 浩樹 忻山 春歌 許 可

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

詹 卉翊 吳 雨璇 馬 子銘

●新入会員一覧

林 雨璐 陸 婷婷 周 子作

10月11日に開催された2025年度評議員会において入会が承認された方々は、以下の通りです。

黃 翔柔 郭 鶴寧 戴 吟儒

●通常会員 12名

川副 智也 九州大学（院）

●国外会員 2名

孫 彬 李 雨珊

日本中国学会 2024年度(令和6年度) 収支決算書

2024年4月1日～2025年3月31日

(単位:円)

科 目	予 算	決 算	摘要	差 額
1. 前年度繰越	¥23,535,428	¥23,535,428		¥0
2. 会員会費	¥9,000,000	¥8,488,000		¥-512,000
3. 寄付金	¥800,000	¥725,000		¥-75,000
4. 預金利息	¥200	¥7,281		¥7,081
5. 著作権料分配金	¥0	¥0		¥0
総 計	¥33,335,628	¥32,755,709	(A) 収入総計	¥-579,919

科 目	予 算	決 算	摘要	差 額
1. 事務局総務費	¥1,920,000	¥1,483,870	(1)～(7)	¥436,130
(1)印刷費	¥480,000	¥404,921	〔便り〕封筒印刷費を含む	¥75,079
(2)通信費	¥480,000	¥422,308	〔便り〕発送費を含む	¥57,692
(3)交通費	¥100,000	¥55,008		¥44,992
(4)消耗品費	¥50,000	¥7,700		¥42,300
(5)庶務処理費	¥50,000	¥0		¥50,000
(6)雑費	¥550,000	¥383,933	振手料、燃費を含む、運送	¥166,067
(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
2. 事務局人件費	¥1,740,000	¥1,690,000	(1)～(2)	¥50,000
(1)幹事手当	¥540,000	¥540,000	幹事3人体制	¥0
(2)謝金	¥1,200,000	¥1,150,000	事務局補佐員謝金を含む	¥50,000
3. 事務局会議費	¥500,000	¥249,525	(1)～(2)	¥250,475
(1)会議費	¥100,000	¥65,895		¥34,105
(2)役員旅費	¥400,000	¥183,630	第1回理事会はオンライン開催	¥216,370
4. 事業費	¥5,230,000	¥5,503,241	(1)～(2)	¥-273,241
(1)学会報等刊行費	¥4,230,000	¥4,503,241	イ～ニ	¥-273,241
イ. 印刷費	¥2,300,000	¥2,673,385	学会報及び名簿	¥-373,385
ロ. 編集費	¥1,200,000	¥1,200,000		¥0
ハ. 翻訳謝金	¥330,000	¥301,700	翻訳料、翻訳謝金	¥28,300
ニ. 発送費	¥400,000	¥328,156	精興社業務委託等	¥71,844
(2)学術大会運営費	¥1,000,000	¥1,000,000		¥0

学会基金

基 本 金	¥4,300,000
前年度繰越金	¥838,199
学会基金積立金拠出	¥0
預金利息	¥2,656
信託収益金	¥193
合 計	¥841,048
日本中国学会賞	¥240,000
次年度繰越金	¥601,048
合 計	¥841,048

特別寄付金会計

前年度繰越金	¥2,590,040
特別寄付金会計拠出	¥0
特別寄付金	¥0
預金利息	¥1,140
合 計	¥2,591,180
日本中国学会賞(上乗せ分)	¥120,000
大会発表者宿泊費補助金	¥110,000
次年度繰越金	¥2,361,180
合 計	¥2,591,180

科 目	予 算	決 算	摘要	差 額
5. 各種委員会運営費	¥1,390,000	¥1,102,655	(1)～(7)	¥287,345
(1)大会委員会	¥65,000	¥5,000		¥60,000
イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ. 会議・旅費	¥50,000	¥0		¥50,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(2)論文審査委員会	¥800,000	¥820,365		¥-20,365
イ. 通信費	¥120,000	¥62,984		¥57,016
ロ. 会議・旅費	¥600,000	¥637,848		¥-37,848
ハ. 謝金	¥60,000	¥80,000		¥-20,000
ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	¥39,533		¥19,533
(3)出版委員会	¥230,000	¥144,806		¥85,194
イ. 通信費	¥5,000	¥340		¥4,660
ロ. 会議・旅費	¥200,000	¥124,320		¥75,680
ハ. 謝金	¥10,000	¥10,000		¥0
ニ. 学会便り編集費	¥10,000	¥10,000		¥0
ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥146		¥4,854
(4)選舉管理委員会	¥120,000	¥20,000	改選年	¥100,000
イ. 通信費	¥15,000	¥0		¥15,000
ロ. 会議・旅費	¥60,000	¥0		¥60,000
ハ. 謝金	¥40,000	¥20,000		¥20,000
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(5)研究推進・国際交流委員会	¥50,000	¥39,744		¥10,256
イ. 通信費	¥5,000	¥430		¥4,570
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥30,000
ニ. 消耗品・雑費	¥35,000	¥34,814	書評シンポジウム準備費を含む	¥686
(6)広報委員会	¥105,000	¥65,280		¥39,720
イ. 通信費	¥5,000	¥860		¥4,140
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥20,000	¥20,000	幹事2人体制	¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	¥24,420	ホームページ維持費を含む	¥25,580
ホ. ホームページ管理費	¥25,000	¥20,000		¥5,000
(7)将来計画特別委員会	¥20,000	¥7,460		¥12,540
イ. 通信費	¥5,000	¥2,020		¥2,980
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥440		¥4,560
1～5	¥10,780,000	¥10,029,291		¥750,709
学会基金積立金拠出	¥0	¥0	学会基金(会員費)に充当	¥0
特別寄付金会計拠出	¥0	¥0	特別寄付金会計(若手支援)に充当	¥0
予備費	¥22,555,628	¥0	支出費目としては計上しない	¥22,555,628
合 計	¥33,335,628	¥10,029,291	(B) 支出合計	¥10,029,291
次年度繰越金	—	¥22,726,418	(A) 収入合計	
総 計	¥33,335,628	¥32,755,709		¥579,919

上記の通り、相違ないことを認めます。

備考 (基本金内訳)

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

2025年4月27日
日本中国学会監事

内山精也
牧角悦子
和田英信

日本中国学会 2025年度（令和7年度）予算書

2025年4月1日～2026年3月31日

(単位：円)

収入の部	科 目	予 算	摘要
	1. 前年度繰越	¥22,726,418	
	2. 会員会費	¥9,000,000	
	3. 寄付金	¥800,000	
	4. 預金利息	¥200	
	5. 著作権料分配金	¥0	
	合 計	¥32,526,618	

支出の部	科 目	予 算	摘要
	5. 各種委員会運営費	¥1,326,000	(1)～(7)
	(1)大会委員会	¥61,000	
	イ. 通信費	¥1,000	
	ロ. 会議・旅費	¥50,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(2)論文審査委員会	¥860,000	
	イ. 通信費	¥120,000	
	ロ. 会議・旅費	¥600,000	
	ハ. 謝金	¥120,000	幹事2人体制
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	
	(3)出版委員会	¥226,000	
	イ. 通信費	¥1,000	
	ロ. 会議・旅費	¥200,000	
	ハ. 謝金	¥10,000	
	ニ. 学会便り編集費	¥10,000	
	ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(4)選舉管理委員会	¥16,000	非改選年
	イ. 通信費	¥1,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(5)研究推進・国際交流委員会	¥46,000	
	イ. 通信費	¥1,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥35,000	書評シンポジウム準備費を含む
	(6)広報委員会	¥101,000	
	イ. 通信費	¥1,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥20,000	幹事2人体制
	ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	ホームページ維持費を含む
	ホ. ホームページ管理費	¥25,000	
	(7)デジタル化推進委員会	¥16,000	
	イ. 通信費	¥1,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	1～5 学会基金積立金拠出	¥10,166,000	
	特別寄付金会計拠出	¥0	学会基金(学会賞)に充当
	予備費	¥0	特別寄付金会計(若手支援)に充当
	合 計	¥22,360,618	
	合 計	¥32,526,618	

学 会 基 金

収入の部	基 本 金	¥4,300,000
	前年度繰越金	¥601,048
	預金利息	¥100
	信託収益金	¥0
	合 計	¥601,148

支出の部	基 本 金	¥240,000
	日本中国学会賞(基金分)	¥240,000
	次年度繰越金	¥361,148
	合 計	¥601,148

特別寄付金会計

収入の部	特別寄付金会計拠出	¥0
	前年度繰越金	¥2,361,180
	特別寄付金	¥0
	預金利息	¥10
	合 計	¥2,361,190

支出の部	日本中国学会賞(上乗せ分)	¥120,000
	大会発表者宿泊費補助金	¥200,000
	次年度繰越金	¥2,041,190
	合 計	¥2,361,190

備考 (基本金内訳)

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

事務局からのお知らせ

彙報

2025年度第1回理事会（6月7日開催、対面・オンライン併用）での決定事項について、6月7日付で臨時評議員会（メール審議）を開催した。報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

- ・2025年度日本中国学会賞受賞者の決定について

孫 楊洋 会員〔文学・語学部門〕

「『諧声品字箋』に与えられた翼——「正音」字書として読まれた歴史——」

永井 もゆ 会員〔文学・語学部門〕

「『隋唐演義』後三十四回の成立について——『資治通鑑』との比較から——」

劉 欣佳 会員〔日本漢学部門〕

「中井竹山『詩律兆』考—その歴史的意義を中心に」

【審議事項】

- ・新入会者の決定について
- ・2025年度定例評議員会の開催日程について

10月11日に開催した2025年度評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

- ・理事長報告
- ・各種委員会報告
- ・『日本中国学会報』第77集及び会員名簿の発行について
- ・学会報編集担当・大会開催校等について（2026年度）
学会報編集担当
大渕 貴之 会員（九州大学）
- 学界展望執筆担当
哲学／伊東 貴之 会員（国際日本文化研究センター）
- 文学／星野 幸代 会員（名古屋大学）

語学／日本中国語学会

学会便り編集担当（2025年第2号・2026年第1号）

高津 孝 会員（鹿児島大学名誉教授）

大会開催校 北海道大学

- ・会員動向について

- ・その他

【審議事項】

- ・2024年度決算・監査報告
- ・2025年度予算案
- ・新入会員の承認
- ・2025年度総会次第について
- ・その他

10月12日の2025年度総会において、評議員会での議決事項を報告した。

◎特別寄付金会計寄付者（20万円以上、歴代）

2021年度：加地伸行会員（300万円）

2025年度：大木康会員（25万円）

◎会費の納付について

会費未納の方は、まずは事務局までお問い合わせ下さい。2ヶ年（2024・2025年度）未納の方には、今年度の学会報を送付しておりません。また、4年間滞納されると除名処分となりますのでご注意ください。

◎住所・所属機関等の変更について

住所や所属機関等に変更がありましたら、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。郵便、あるいはファックスでも受け付けてはおりますが、なるべく電子メールをご利用くださいますようお願いいたします。

◎クレジットカードによる会費決済について

海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を行っております。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページの URL をお送りいたします。なお、利用可能プランは VISA・MASTER のみです。ご了承ください。

日本中国学会事務局

電子メール : info@nippon-chugoku-gakkai.org

郵 便 : 〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

斯文会館内

ファックス : 03-3251-4853

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号 : 00160-9-89927

加入者名 : 日本中国学会

メールアドレス登録のお願い

日本中国学会では、会員のみなさまのメールアドレス登録をお願いしています。まだご登録頂いていない方はホームページの「メールアドレス登録（会員専用）」（URL : <https://nippon-chugoku-gakkai.org/?p=2274>）よりご登録をお願いいたします。

パスワードは sinology1234 です。メールアドレスの変更も、上記の登録フォームから可能になりました。

登録フォームにアクセスできなかった場合は、事務局 (info@nippon-chugoku-gakkai.org) 宛に、メールアドレスをお知らせください。

訃 報

『学会便り』2025年第1号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(敬称略)

多田 光子（近畿地区） 2025年3月29日

陳 狩（中国・四国地区） 2025年5月28日

高橋 稔（関東地区） 2025年6月10日

「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行予定の「学会便り」に掲載することになっています。

2025年1月から同年12月末までに開催された国内学会の原稿は、来年（2026）2月末までに、下記あてに電子メールでお送りください。

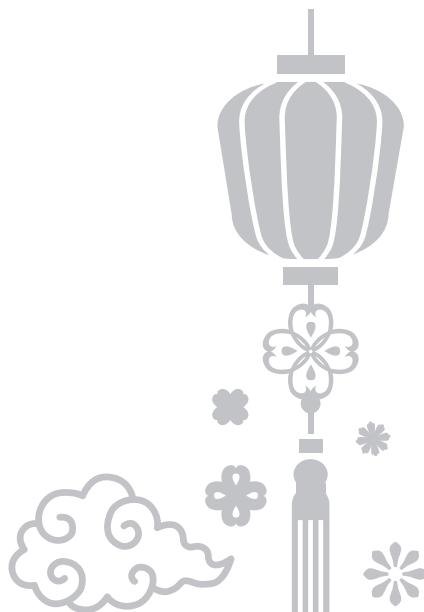
従来ご報告が無かった学会（研究会）のご報告も歓迎いたします。

なお、紙面の都合上、お送りいただいた原稿を編集局で一部加工することがあります。また、校正はありませんので、あらかじめご承知おきください。

また、Zoom や Teams、あるいは YouTube 動画配信などさまざまな開催形態で行われたと思いますが、本紙ではそれらを一括して「オンライン開催」と表示させていただきます。

原稿送付先 : gakkaidayorikagoshima@mail.com

（放送大学鹿児島学習センター・高津孝あて）



「会員論著目録（2025年）」作成への協力のお願い

会員各位

日本中国学会理事長 小島 豪

すでに日本中国学会ホームページにおいてご案内のように、本学会では、デジタル化推進の一環として、引き続き、下記のとおり、「会員論著目録（2025年）」の作成を試行することになりました。会員の皆様に、Google フォームのアンケートに回答入力する方法でデータをご提供いただいた上で、作成した目録は、学会ホームページでの公開を予定しております。

つきましては、入力に必要なパスワードをお知らせしますので、是非とも、学会ホームページ内の当該項目にアクセスの上、入力にご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

記

【対象】 2025年1月～12月に公刊された著書・論文等（翻訳、書評、短報などMISCも含む。なお、事典類については、項目ごとではなく、書籍本体を対象とする）

【入力】 原則、会員自身が入力する。ただし、入力が困難な場合は、メールや書面による提出を学会事務局で受け付ける。

【入力期間】 2025年12月～2026年3月末

【パスワード】 roncho2025

【分類・区分】 従来の形式に「歴史」を追加し、「哲学」「文学」「語学」「歴史」の4つに大別した上で、時代・分野等に細分する。また、複数の区分にまたがる内容の論著については、必要に応じて、同じ内容のデータを複数回、関連する区分に回答入力することとする。

なお、「会員論著目録」（2022年）（2023年）（2024年）の補遺についても、同期間、入力できますので、該当の場合は、ご記入くださいますよう、お願ひいたします（過去3年間の内容については、学会ホームページでご確認いただけます）。ただし、過年度に遡って入力できるのは今回までとし、次年度からは当該年度に公刊された著書・論文等のみ受け付けることとさせていただきます。

※不明の点がありましたら、学会事務局にお問合せください。

「日本中國學會報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

- 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

- 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

- 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
- 原稿枚数は、本文・注・図版等を合わせて、以下のように定める。ワープロ使用の場合、用紙サイズはA4、1行30字、毎ページ40行、文字は本文、注ともに10.5ポイントによって印字し、18ページ以内（厳守）とする。この書式に合わないものは、受理しないこともあるので、注意すること。採用論文刊行の段階で、規定のページ数を超過した場合には、調整を求めることがある。なお、手書き原稿提出の場合は400字詰原稿用紙54枚以内（厳守）とし、論文が採用された場合、電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。
- 図版を必要とする場合、『學會報』の組版における占有面積により文字数を換算する。『學會報』半ページ分が、ほぼ25行（1行30字）である。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

- 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、横書きも可とする。
- 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国语の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方 자체を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
- 原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、刊行にあたっては全文を原則として旧漢字体（印刷標準字体）に統一する。ただし、本人の申し出によって、常用漢字体での印刷を認める。刊行にあたっては、本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントの活字を使用する。特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所に明記する。特に必要とするものについては、簡体字等での引用も可とする。
- 注は、各章・節ごとにつけて、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。注の表記につい

ては、本学会が定めたガイドラインに沿うことが望ましい。

- 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例：孫逸仙 Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

- 応募時の原稿には2000字以内の和文の論文要旨を添付する。
- 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、1200字程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

- 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月15日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

斯文会館内 日本中国学会

- 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想、文学・語学、日本漢学、歴史）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、複数部門にわたる審査を希望することができる。
- 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出する。原稿は原則として返却しない。
- 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校正

- 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正是初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。

抜刷

- 論文抜刷に関わる作成費用等は本人負担とする。

その他

- 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

(昭和62年10月11日制定) (平成13年5月13日修正)
 (平成14年10月13日一部修正) (平成15年10月5日一部修正)
 (平成19年10月7日一部修正) (平成20年5月17日一部修正)
 (平成21年10月11日一部修正) (平成22年6月6日一部修正)
 (平成22年10月10日一部修正) (平成23年10月9日一部修正)
 (平成24年10月7日一部修正) (平成25年3月31日一部修正)
 (平成25年10月13日一部修正) (平成27年10月10日一部修正)
 (平成29年6月12日一部修正) (平成30年6月3日一部修正)
 (令和4年10月5日一部修正)